志賀直哉年譜考（十六）

――明治四十二年七月から十二月まで――

生井知子

明治四十二年（一九〇九）（数え二十七歳・満二十六歳）

7・1（木）「麦」第十八号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『習作』掲載。（里見弴『雑記帖』）直哉は「イタヅラガキ」に加わる。（「麦」第十八号批評欄・補④P502～503）

この頃　直哉は有島武郎に宛てて葉書を書くが未投函。郡虎彦が船長をしている父の船で台湾へ行くことになり、昨日神戸に帰ったので、講習会のことは中止になりそうだとのこと。（？・？・？有島武郎宛書簡）

この頃　直哉は永井荷風『牡丹の客』（M42・7「中央公論」）を読んだか？　直哉は『牡丹の客』が好きだった。（『愛読書回顧』）

7・？　「望野」第四十九号発行。（『武者小路実篤全集』年譜）

7・？　直哉は、女中との結婚事件の作品化を構想し、《有の兄の位置の事（有を含む―しかも今の自分）をして批評せしむべし。》と手帳にメモする。（「手帳13」補⑥P33）

7・？　直哉は、今の青年は自惚れる事で自信を得ようとすると手帳に記す。（「手帳13」補⑥P33）

7・？　直哉は手帳に、主人公と父の関係を書く時、ビョルンソン“Synnöve Solbakken”（『シンネェヴェ・ソルバッケン』）を引用しようと記す。（「手帳13」補⑥P33～34）

7・？　直哉はCと会って、別れることをついに承知させる。ただし直哉は志賀家の者にはそのことを告げず、Cとの音信も続けていた。（未定稿129『或る旅行記』五）（『暗夜行路』草稿13十八）

7・7（水）　直哉は、有島生馬に手紙を書く。だんだん字に書かれた道徳から遠ざかって行くが、快く感じている。パリには徴兵検査を受けてから行くかどうかで迷っている。外国に三十五歳までいなければならないなら、虫歯が十五本あるのでハネラレそうだから検査を受けてから行きたいが、三十二歳までで徴兵が逃れられるなら受けないで行く。九十月中にCとのことをはっきりさせ、二三月までに仕事を終え、春一月ほど一人旅をし、長い小説を出版し、五六月に洋行したいと思っていた。しかし有島生馬が来年帰国するなら、予定を早めたい、など。（M42・7・7有島生馬宛書簡）

7・10（土）　武者小路実篤が直哉に葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）（『武者小路実篤全集』）

7・15（木）　「麦」第十九号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『文学は個人的であるべきである（偶感）』『蝿と児供（偶感）』『女の一生梗概』（モーパスサン）、田中治之助の翻訳『家の中』（メーテルリンク）『章句抜萃』（メーテルリンク）掲載。（里見弴『雑記帖』）（式場隆三郎『白樺の人々』）

7・16（金）　木下利玄が直哉に葉書を書く。今日、森鴎外『キタ・セクスアリス』と小栗風葉『恋ざめ』を半分読んだ、鴎外のものは面白い、君が済み次第、武者小路実篤に渡してくれ、《五十号のもの何もかけぬ、》と言う。（→「望野」第五十号？）（『志賀直哉宛書簡』）

7・19（月）　柳宗悦が赤城から直哉に絵葉書を書く。十六日に九里四郎と来た、メチニコフを読みはじめた、など。（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

7・21（水）　武者小路実篤が直哉に葉書を三枚続きで書き、直哉が寄せた『楽天家』に対する批評について述べる。（『武者小路実篤全集』）

7・23（金）　直哉は、鵠沼へ行く里見弴・中村貫之と途中まで同じ汽車に乗り合わせ、箱根へ向う。（里見弴『君と私』二十九）（里

見弾・中村貫之『七月』）

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布八月十一日の消印。母・有島幸子が来年中に帰国するように言う、七月七日の封書が唯今着とのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

7・24（土）木下利玄が、芦の湯の直哉に葉書を書く。歯医者に行くので、三十一日に箱根に赴くつもり、部屋を掛け合ってくれとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

7・26（月）木下利玄が、芦の湯の直哉に葉書を書く。二十七日の消印。三十一日に行く、「麦」第十九号は読んで持って行くとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

武者小路実篤が、芦の湯の直哉に葉書を書く。『楽天家三』と葉書を受け取った礼。（『武者小路実篤全集』）

7・27（火）武者小路実篤が、芦の湯の直哉に葉書を書く。（『武者小路実篤全集』）

7・28（水）赤城から柳宗悦が、芦の湯の直哉に葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

武者小路実篤が、芦の湯の直哉に葉書を書く。来月になると「麦」「望野」の同人で東京にいるのは武者小路実篤だけになるとのこと。（『武者小路実篤全集』）

7・29（木）武者小路実篤が、芦の湯の直哉に葉書を書く。（『武者小路実篤全集』）

7・30（金）木下利玄が、芦の湯の直哉に葉書を書く。三日に行くことにしたとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

武者小路実篤が、木下利玄・勘解由小路資承と寄せ書きで、芦の湯の直哉に葉書を送る。（『武者小路実篤全集』）

8・1（日）「麦」第二十号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴・中村貫之の『七月』『「七月」の後に附す』掲載。（里見弴『雑記帖』）

武者小路実篤が、木下利玄らと共に、芦の湯の直哉に葉書を書く。（『武者小路実篤全集』）

8・2（月）赤城から柳宗悦が、芦の湯の直哉に手紙を書く。（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

8・7（土）　武者小路実篤が、芦の湯の直哉と木下利玄に葉書を書く。（『武者小路実篤全集』）

8・14（土）　直哉は、宮松亭から、元箱根の木下利玄に絵葉書を書く。（M42・8・14木下利玄宛書簡）

8・15（日）　「麦」第二十一号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『芸術品（偶感）』『趣味と云ふ事に就いて（偶感）』、武者小路実篤の『無智万歳』掲載。（里見弴『雑記帖』）

（式場隆三郎『白樺の人々』）直哉は「イタヅラガキ」に加わる。（「麦」第二十一号批評欄・補④P503）

8・16（月）　箱根の木下利玄が直哉と武者小路実篤に宛てて葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）

8・18（水）　里見弴が盛岡から直哉に葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）

赤城から柳宗悦が、直哉に葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

元箱根の木下利玄が直哉らに葉書を書く。十九日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

8・21（土）　直哉は赤城に出発。武者小路実篤と木下利玄が寄せ書きで、赤城の直哉に葉書を送る。（『武者小路実篤全集』）

8・23（月）　直哉は、赤城から有島生馬に葉書を書く。ここはかねて皆からいい所と聞いていたが、それ以上いい、同室に柳宗悦、隣室に九里四郎がいるとのこと。（M42・8・23有島生馬宛書簡）

8・25（水）　里見弴が洞爺湖から直哉に葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）

武者小路実篤と田中治之助が寄せ書きで、赤城の直哉に葉書を送る。（『武者小路実篤全集』）

8・26（木）　狩太に旅行中の里見弴が直哉からの葉書を受け取る。（里見弴『洞爺行』）

9？　世話をしてくれる人がいて、Cの叔父と話がつき、直哉とCとの別れ話がまとまる。（未定稿129『或る旅行記』五）（M42・7・7有島生馬宛書簡）

＊『暗夜行路』草稿13の十六によれば、話を付けてくれたのは、《スヰスに永くホテルの研究にいつてゐた》《旧い年上の友》岩下家一らしい。

＊Cは裁縫女学校を出た後、産婆になって身を立てようと東京の助産婦学校に入り、そこで知り合った友達の兄と大正二年に結婚、一男二女をもうけ、大正十年、朝鮮で流感にかかり没。墓は秦野市にある。（阿川弘之『志賀直哉』）

9・1（水）「麦」第二十二号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『旅』『洞爺行』、武者小路実篤の『失愛』掲載。（里見弴『雑記帖』）（式場隆三郎『白樺の人々』）

9・2（木）有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ四日の消印、麻布二十二日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

9・4（土）直哉は、二月ほど京都に住もうかと考えて、夜、新橋駅から出発。瀬戸内海の景色が見たい、祖母・留女に対する不平、仲間と会いすぎるので暫く一人でいたい等の理由による。（草稿『一日二夕晩の記』）

＊未定稿129『或る旅行記』五では、自家も友達も厭になり、仕事も出来ず、二三ヶ月京都に住んでみて、良ければ二三年も自家に帰るまいと思って京都に行った、とある。

9・5（日）直哉は九時に京都着。下宿を探して歩く。藤田という老女に好意を持ち、その家に下宿する事にする。新京極で東猿の看板を見る。今の女義太夫中一番好きな人だが、一年余りほとんど義太夫には親しまない。旧友・今園と出会う。ひどく下痢をし、一泊もせずに帰京。（草稿『一日二夕晩の記』）

9・6（月）九時、直哉は東京着。四日床に就く。（草稿『一日二夕晩の記』）

9・9（木）直哉は『唾』を書いたか。（未定稿80）

9・12（日）有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布十月二日の消印。帰朝ということに決定したとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

9・14（火）夕、直哉は『一日二夕晩の記』を完成。（『ある一頁』草稿）

9・15（水）「麦」第二十三号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『チエホフの「人影」とモウパスサンの「温室」』『半日の記』掲載。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第二十三号批評

欄・補④P504）

直哉は、ストリンドベルグの“Swan white”（『白鳥姫』）を読む。（「手帳13」補⑥P40）

9・17（金）　直哉は『帰途』を執筆。（「手帳13」補⑥P40）（→未定稿107『小説　帰途』）

9・20（月）　この頃、回覧雑誌を「白樺」と改名し、第一号発行か。「白樺」第一号には、木下利玄の『水晶房』（ウィリアム・ブレイク）『第二十五夜』（アンデルセン）『霧の朝』が掲載された。（生井知子『十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄』R1・7「同志社女子大学　総合文化研究所紀要」）

木下利玄が、「白樺」第一号の武者小路実篤『疑惑』一幕と正親町公和『父なき児』を読む。（木下利玄日記）

直哉は初めて娼婦を買う。（M43・9・19日記）最初は洲崎に行った。想像以上にすべてが汚かった。（未定稿129『或る旅行記』五）

9・21（火）　直哉は、武者小路実篤と、大宮八幡・井ノ頭などを散策し、夜、『彼岸遊歩』を執筆。（未定稿82）

9・23（木）　東京やげん堀大又で、直哉は、米津政賢、川村弘、田村寛貞、松平春光、柳谷午郎、杉山得一と遊び、木下利玄に葉書を送る。（M42・9・23木下利玄宛書簡）（『芳舟遺稿』所収M42・9・24有島生馬宛寄せ書き書簡）

9・25（土）　直哉は吉原遊郭に行く。敵娼は岐阜の女だった。（未定稿129『或る旅行記』五）

9・27（月）　この頃、「白樺」第二号発行か。「白樺」第二号には、木下利玄の『小説　顔の創（きず）』が掲載された。（生井知子『十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄』R1・7「同志社女子大学　総合文化研究所紀要」）

直哉は「麦」第二十三号にコメントを記す。（「麦」第二十三号批評欄）

9・28（火）　有島生馬が直哉に絵葉書を書く。来週はモンマルトルに通って梅原龍三郎と肖像を作り合う約束をしたとのこと。（『志賀直哉宛書簡』）

9・30（木）　直哉は『小説　人間の行為』〔A〕を執筆。（『剃刀』草稿）

この頃か？　郡虎彦が直哉に手紙を書く。雑誌六月、七月、八月、九月の会費合計八円送る、とのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

10・1（金）「麦」第二十四号をもって終刊。（里見弴『君と私』三十一）（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『麦の一年を想ふ』『母』『朝』『後に狂せる』、田中治之助の『若い親父』『Aさんの帽子』『盲鬼』、正親町実慶の『姉の家』、園池公致の『手紙』掲載。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第二十四号批評欄・補④P504）

10・4（月）この頃、「白樺」第三号発行か。「白樺」第三号には、木下利玄の『雨後の月夜』が掲載された。（生井知子『十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄』R1・7「同志社女子大学　総合文化研究所紀要」）

直哉は、『恐しい遊戯（藤村の芽生を読む）』を執筆。（未定稿83）

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布二十三日の消印。梅原龍三郎の所に絵を書きに行く件は、二日目にお互いの顔に愛想を尽かして中止になった、など。（『志賀直哉宛書簡集』）

10・7（木）直哉は、田村寛貞に手紙を書くが投函はしなかった。他人のことで、人には打ち明けても君には打ち明けていないことが二つあるが今度話す、自分のことでまだ誰にも言わないことがあるが、それをまず君に言う、など。（M42・10・7田村寛貞宛書簡）

この頃か？　直哉は武者小路実篤に、自分が女遊びを始めたことを打ち明ける手紙を書く。武者小路実篤は《とらはれてゐるのかも知れないが、僕は矢張り嬉しくない気がした》と返事を書く。（未定稿129『或る旅行記』五）

＊『武者小路と私』によると、《放蕩を始めた時（中略）先づ第一に武者にそれを打明けた。（中略）武者は（中略）是非については一ト言も云はなかつた》と言う。

10・11（月）頃？

「白樺」第四号発行。「白樺」第四号には、木下利玄の『紐（短歌）』『橋本屋』が掲載された。（生井知子『十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄』R1・7「同志社女子大学　総合文化研究所紀要」）

10・13（水）　直哉は『小説　殺人』を完成。（『剃刀』草稿）

木下利玄が直哉に葉書を書く。十四日の消印。診断書と休学願を今日事務所に出したところ、授業料は一学期だけはおさめなくてはならないと言われた。今度の「白樺」は何日にどこと決まったか、など。（『志賀直哉宛書簡集』）

武者小路実篤が直哉に、『殺人』は巧いと思ったと感想の葉書を書く。（『武者小路実篤全集』）

10・14（木）　直哉は「麦」第二十四号に批評を記す。（「麦」第二十四号批評欄）

直哉は、磐城の湯山幸太郎に、父の好物の塩辛を頼む手紙を書く。（M42・10・14湯山幸太郎宛書簡）

10・16（土）　有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ十八日の消印、麻布十一月六日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

10・17（日）　有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ十八日の消印、麻布十一月六日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

10・18（月）頃？

「白樺」第五号発行。「白樺」第五号には、木下利玄の『図書館』が掲載された。（生井知子『十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄』R1・7「同志社女子大学　総合文化研究所紀要」）

この頃（女遊びを初めて一月目）

直哉は、吉原角海老楼のお職女郎・桝谷みね（大巻）のもとに通い始める。直哉は、遊女屋の下等なのが嫌だったので、待合の芸者遊びをしたいと考え、その前に吉原で最も大きそうな家の一番上にいる女の所に行ってみようとして、大巻に出会い、惹きつけられた。（『暗夜行路』草稿13七）（近藤富枝『今は幻　吉原のものがたり』掲載『新よし原細見』）

大巻は上新のお咲（他にお春。お咲が止めた後にお竹）、中新のお千代、下新のおふよ、まめどん二人を使っていた。（近藤富枝『今は幻　吉原のものがたり』）

直哉から大巻への連絡は電話、大巻からは郵便局留置の手紙で連絡をとった。（阿川弘之『志賀直哉』）

この頃か？　直哉は田中治之助の家の玉場で玉突きを習い始める。（里見弴『君と私』三十四）

10・21（木）か？

志賀家で、里見弴、田中治之助、園池公致らがビールを大量に飲む。これ以前は、里見弴には自分の意志で酒を飲むという習慣はなかった。この頃、直哉は、ビールを毎日少しずつ飲むと肥るという話を聞き、晩飯の時に飲むことにしていた。（里見弴『君と私』三十四）

10・22（金）有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ二十三日の消印、麻布十一月十日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

田中治之助が直哉に絵葉書を出す。昨夜、里見弴・田中治之助ら「麦」同人が志賀家を汚したことへのお詫び。（『志賀直哉宛書簡集』）

10・23（土）木下利玄は、近松研究とドイツ語の勉強のため、しばらく「白樺」の投稿は出来た時だけにすることにする。夜、木下利玄、武者小路実篤、細川護立、里見弴、田中治之助、園池公致、柳宗悦が、志賀家に来宅。雑誌の相談をする。雑誌の名の投票に際しては、木下利玄のアイデアの「人」「草」や「流」などの得票が多数。各欄の責任者を決める。木下利玄は雑報の責任者で創作欄は次点。（木下利玄日記）

10・25（月）頃？

「白樺」第六号発行。

10・28（木）直哉は、湯山幸太郎に塩辛の礼の葉書を書く。（M42・10・28湯山幸太郎宛書簡）

10・29（金）直哉は『「かういふ小説が書きたい」』を執筆。（未定稿84）

10・30（土）来年から出す雑誌の他に、自分の作を集めた単行本を出したいとの相談の手紙を武者小路実篤が直哉に送る。『お清さん』『こたつ』『机に向つて』『無知万才』『小なる超人』『美しき少女』『蝶と毛虫』『悪魔』『なまぬるい室』『小さい樫』、新体詩、『疑惑』を収録したい。（『武者小路実篤全集』）

10・？

バーナード・リーチを直哉と武者小路実篤が訪ね、エッチングの話を聞く。（『武者小路実篤全集』年譜）

＊『リーチのこと』によれば、武者小路実篤・柳宗悦・里見弴・児島喜久雄らと一緒だった。

＊『リーチのこと』（S8・4「工芸」）によれば、この時オーガスタス・ジョーンの絵を見せてもらった。リーチは山脇信徳の「停車場の朝」をいち早く明確に認めたと言う。

この頃から　直哉はいつもそわそわしていた。里見弴と当てもなく歩き回り、おでんや鮨の立ち食いを覚え、日本橋の花村という小料理屋にも行った。里見弴はよく酒を飲むようになった。席亭へもよく行き、落語を聞いた。（里見弴『君と私』三十四）

魚河岸の蛇ノ目寿司という屋台の店、高七というてんぷらの屋台の店、花村（マル花）という一杯飲み屋などによく行った。（里見弴『怡吾庵酔語』「化学的変化」）

11・1（月）頃？

「白樺」第七号発行。

11・2（火）　直哉は『ヤハリ夢』を執筆。（未定稿85）

直哉は『樽柿』を執筆。『ヤッカイ者』（→未定稿111）を書こうとしたこと、滞在中のおうの伯母と祖母・留女とのやりとりなども書く。（未定稿86）

木下利玄が、「白樺」第六号の正親町公和『姉』を読む。（木下利玄日記）

11・4（木）　沼津の正親町公和の家で、直哉・正親町公和・正親町実慶・武者小路実篤の写真を里見弴が撮る。（『新潮日本文学アルバム　志賀直哉』掲載・写真）

11・5（金）　直哉は、武者小路実篤、木下利玄、正親町実慶、里見弴と共に沼津の正親町公和の家に遊び、木下利玄の家に寄せ書きの絵葉書を送る。（M42・11・5木下利玄宛書簡）（里見弴『君と私』三十四）

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布二十三日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

11・6（土）　田中治之助の家で、直哉は、母の様な薫さんと結婚したいと望む主人公を描いた『小説　薫さん』を執筆。表題は、はじめは『小説　薫さんの年』だった。（『冬の往来』草稿）

木下利玄が、青木直介・柳宗悦・正親町公和と寄せ書きで、沼津から直哉に葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡集』）

11・8（月）頃？

「白樺」第八号発行。

11・9（火）　川口武孝・康子夫妻の長女・喜久子が生まれる。（『武者小路実篤全集』年譜）（阿川弘之『志賀直哉』）

11・12（金）　直哉は『小説　其ある夜の事』を執筆。（未定稿87）（→「ノート9」補⑥P233『或る夜の事』）

11・15（月）頃？

「白樺」第九号発行。「白樺」第九号には、木下利玄の『帯』が掲載された。（生井知子『十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄』R1・7「同志社女子大学　総合文化研究所紀要」）

11・18（木）　直哉は『ラヴシーン』を執筆。（『彼と六つ上の女』草稿）

11・19（金）　有島生馬が直哉に絵葉書を書く。藤島武二がローマから到着したので毎日一緒にいるとのこと。（『志賀直哉宛書簡』）

11・22（月）頃？

「白樺」第十号発行。「白樺」第十号には、木下利玄の『新富座のはねたのハ十一時だつた。』が掲載された。（生井知子『十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄』R1・7「同志社女子大学　総合文化研究所紀要」）

11・24（水）　直哉は《「貴方、本気で惚れちゃイヤですよ」》で始まる『彼と六つ上の女』の草稿を執筆。（『彼と六つ上の女』草稿）

11？　武者小路実篤が白樺原稿用紙に、女郎とのことを描いた『其ある夜の事』と『三階の部屋』の感想を書いて、直哉に送る。（『志賀直哉宛書簡』）（『武者小路実篤全集』）

11・30（火）　「白樺」第十一号を正親町公和家で編集。（『武者小路実篤全集』年譜）

12・1（水）　園池公致と青木直介が、有馬温泉から直哉に絵葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）

12・7（火）　直哉は、午前五時半、『小説　恐しき種子』を書き上げる。（未定稿88）

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布二十五日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

12・11（土）　雑誌の名前は、嘗て木下利玄が考えた「草」に決まる。（木下利玄日記）

12中旬　新雑誌の名称は、「草」と決まり、発行所を洛陽堂に頼む事となる。（『武者小路実篤全集』年譜）

12・18（土）　郡虎彦が神戸衛生院から直哉に手紙を書く。十一月・十二月分の雑誌の会費はもう少ししてから送るとのこと。別紙に、郡虎彦・園池公致の連名で、雑誌「草」は不要だから返送すると記す。（『志賀直哉宛書簡』）

12・29（水）　郡虎彦・柳宗悦・園池公致が、神戸から直哉に葉書を出す。雑誌「草」がやめになったのはうれしいと園池が記す。（『志賀直哉宛書簡集』）

12・30（木）　有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ三十一日の消印、麻布四十三年一月十八日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

この年か？前後の年か？

有島生馬が西洋から送ってきたバルトのりんごの絵と道の絵を見に、柳敬助と一緒に志賀家を訪ねてきた熊谷守一と直哉は初めて会う。（対談『熊谷守一』）